



吉田 芽以 (よしだ めい) 第三小 4年生

作品名：「犬たちをおくる日」を読んで

図 書：犬たちをおくる日

この命、灰になるために生まれてきたんじゃない！

「二〇〇九年二月十九日。その日著者が殺したのは三十頭の成犬、七匹の子犬、十一匹のねこであった。その死に顔は、人間をうらんでいるようには見えなかった。彼らはきっと最後のそのしゅん間まで飼い主がむかえに来ると信じて待っていたのだろう。

『だれかをきらいになるより、だれかを信じているほうが幸せだよ』

犬たちの声が聞こえる。この命、どうしてうら切ることができるのだろうか・・・』

これは愛媛県動物愛護センター、犬たちの命を救うため、日々奮闘する職員の日常を追いながら、「命」とは何なのかを考えた本に出てくる言葉です。

私の祖父母の家では二匹の犬がいて、その一匹は足にしょう害をもっています。ミニチュアピンシャーという種類で毛並も顔だちもよく、ペットショップでは十五万円から五十万円で売られています。ですが、足にしょう害があり売り物にならないためだけの理由で殺処分されようとしていたのです。

しかし私のおじさんが「殺されるのはかわいそうだから」と、祖父のりょうかい無しにつれてきてしまいました。祖父は

「しょう害があっても家に来たのは縁だからしかたないね。」

と言い飼うことが決まりました。

その犬は私が二才の時に来て八年間いっしょに遊んだことが当たり前だと思っていたけれど、この本を読んで、そのことが当たり前ではなかったと気がつきました。

私はこの本に出てくる「命のイス取りゲーム」という意味が分かりませんでした。それは、じょうと会に出せる犬を決める事でその目安は、第一が健康、第二が性格が人なついでことです。じょうと会に出ることができなかった犬は、数日の間に必ず殺されます。

私は選ばれなかった犬がこんなにかんたん殺されてしまうのはおかしいと思います。

今まで飼っていた犬をすててかなしくないのが、人間はバカだ！と強く思いました。

私はこんなにかんたんに殺されないようにするにはどうしたらいいのかを考えました。例えば、学校のけい示板にポスターをはったり、駅前ではビールを配り、動物愛護の講習会をたくさんの人に知らせたりして、動物は家族なんだという事を分かってもらう事もできると思います。他にはぎゃくたいされた動物達を助けてあげる事も大切です。私は一つでも動物の命を助けられるじゅう医になりたいと思いました。動物にかんする本を読んで、動物のことをもっと知りたいです。